

<b>Title</b>	ジャパニーズ・ドリーム : 勇気、希望、そして夢
<b>Author(s)</b>	菊地, 順
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume27, 2012.3 : 47-71
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3914">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3914</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

---

## ジャパニーズ・ドリーム

——勇気、希望、そして夢——

菊地 順

### 東日本大震災を覚えて

東日本大震災が起ってから七か月余りが経ちました。時間の経過とともに、日本全体は、初めに受けたあの衝撃からは、少しずつ解放されてきたのではないのでしょうか。今は、むしろ被害の現実を客観的に見据える中であつて、衝撃よりは、復興の現実的困難さに直面しているとも言えます。しかし、直接被災に遭われた人たちは、決してそうではないと思います。特に肉親や親族や友人たちを失った人たちは、そうではないと思います。おそらく、愛する人を失った悲しみ、その遣り切れなき、痛み、空虚感といったものが、深い傷となって残っているのではないのでしょうか。そして、その傷は、ますますその人の人格の奥深くまで入り込み、人格そのものを変え、その人の生き方自体を大きく変質させてしまうのではないのでしょうか。そのようにして、その人の人生を、〈それ以前〉と〈それ以後〉とに真つ二つに分断してしまうのではないかと思えます。言わば、自分の中に二つの自分が存在するようになってしまふのです。これは、人間にとって非常に危険なことです。そして、それは大きな精神的危機を引き

起こすことにもなるのではないかと思えます。しかし、そうした危機は、個人のレベルだけではなく、国家のレベルにおいても、しばしば生じることではないでしょうか。

振り返ってみると、日本は今までに、何度かこういう危機を経験してきました。二〇世紀においては、何よりも一九四五年の敗戦が大きな危機であつたと思えます。また一九世紀においては、一八六七年の明治維新が大きな危機であつたのではないのでしょうか。またもつと近いところでは、一九八九年のバブル経済の崩壊が、大きな危機であつたように思います。そうした、国としての歩みが、〈それ以前〉と〈それ以後〉において大きく二分されるという衝撃的な危機を、日本は何度となく経験してきたのです。しかし、それはまた、世界も同じであります。何よりも、わたしたちは、一〇年前にアメリカで起こつた同時多発テロを思い起こすのではないのでしょうか。あの事件を境に、アメリカは大きく変わりました。以前のアメリカは、人々に夢を与えてくれる国でした。「アメリカン・ドリーム」という言葉がまだまだ現実の言葉として生きていました。しかし、あの事件以後変わったのではないのでしょうか。「アメリカン・ドリーム」という言葉が力を失い、その威光が徐々に消えつつあるのではないのでしょうか。そこには、この一〇年間のアメリカ経済の陰りも影響しているかもしれません。いずれにしても、国家であれ、個人であれ、それまでの生き方が分断されるような衝撃的な事件、出来事というのが、しばしばわたしたちの人生を襲うのです。

パウロ・ティリツヒという神学者は、それを、聖書の言葉を用いて、「地の基ふるい動く」と表現しました。また哲学者のキルケゴールは、「大地震」と表現しました。それは、大地が揺れ動くのみならず、精神的な基盤が揺れ動き、肉体だけではなく精神的にも立ち続けることができなくなり、終には地べたに横たわらざるを得なくなつてしまふような地震なのです。そして、そうした地震こそ、人生における最大の危機なのではないでしょうか。今回の

大震災も、そうした危機であったと言っていると思います。そして、こうした危機に遭遇して、わたしたちはなぜこうした悲劇が起こったのかと、自問自答するのではないのでしょうか。

### 「ヨブ記」の問いかけるもの

実は、聖書の中にも、そうした人生の危機に直面した人の話が出てきます。それは、旧約聖書のヨブ記という書物に出てくる「ヨブ」という人の話です。ヨブは「義人」ヨブとも呼ばれているように、神の前に正しい人でありました。いつも神を畏れ、神への深い信頼に生きていた人です。しかし、ある時、このヨブに大きな悲劇が起こります。突然、自分の財産のすべてが失われてしまうという悲劇が起こったのです。すべての家畜と使用人たちが失われ、しかも子どもたちも一人残らず天災に遭って死んでしまいました。後に残されたのは、自分と妻だけでした。しかし、悲劇はこれだけでは終わりませんでした。さらに追い打ちをかけるように、今度はヨブの体中にひどい皮膚病が発生し、それに苦しめられることになったのです。これを見た妻は、その悲惨さに深く絶望し、ヨブに向かって、「神をのろって死になさい」と叫びだすほどでした。しかし、その時ヨブは、「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」（ヨブ記第二章一〇節）と言って、神への信頼を失いませんでした。しかし、こうした大地震を経験して、ヨブもまた、なぜ自分の身にこうした悲劇が起こったのかと尋ねざるを得なかったのです。そして、その心の奥底には、神を信頼して生きてきた自分になぜこのような悲劇が起こったのかという深刻な問いがあったのです。しかし、それはヨブだけではなく、誰の心にも生じる問いではないのでしょうか。今回の大震災においても、多くの人が「なぜ」と問うたのではないのでしょうか。そしてまた、人生における一つ一

つの悲劇に対しても、「なぜ」と問うているのではないのでしょうか。

ヨブ記という書物は、この問いをめぐって、ヨブと友人たちとの議論が展開されている書物です。なぜ神を信じ、神を信頼して生きてきた「義人」ヨブに、こうした悲劇が起きたのか、そのことをめぐる議論です。友人たちは、初め、ヨブの置かれた状況に深く同情しますが、次第に、ヨブにこうした悲劇が起きたのは、結局のところ、ヨブ自身に何か原因があったからだと言及します。ヨブが人々の知らないところで、神に罪を犯していたから、その裁きとして、こうした悲惨な出来事が起こったのだと考え、ヨブを責めたのです。それは、いわゆる「因果応報」の考えでありました。それに対して、ヨブは、その考えに強く反対します。自分は完全ではないとしても、これほどの悲劇を引き起こすような罪は犯していないと主張するのです。そして、因果応報の考えを否定するのです。実は、この議論には結論はありません。話は、最後まで、ヨブと友人たちとの同じような議論が続きます。しかし、最後の最後で、突然話が変わるのです。突然、神が現れ、その議論に割り込んでくるのです。そして、神の偉大さへと目を向けなかった友人やヨブを厳しく叱責するのです。この神の突然の介入は、大事なことをわたしたちに語っているように思います。この話は、最後、ヨブがもう一度神の祝福を受け、再び多くの財産と家族が与えられたという話で終わりますが、しかしこの話は、だからと言って単なるハッピーエンドで終わる話ではなく、何よりも、わたしたちの考えを深く支配している「因果応報」の考えを、その根底から打ち破る話でもあるということなのです。

わたしたちが発する「なぜ」という問いには、深いところで因果応報の考えがあるのではないのでしょうか。そして、それをめぐって、ある時には自分を責め、また人を責め、時には神を責めるのではないのでしょうか。しかし、そこに出口はないのです。万人を納得させることができるような答えはないのです。むしろ、そうした考え方から

解放され、そうした苦しみの中から新しく生きることが大切なのではないのでしょうか。改めて神の祝福を受けたヨブのように、神の大きな力に信頼して、新しく勇氣をもって生きることが重要なのです。

先ほども触れたパウル・テイリツヒという神学者は、繰り返し「勇氣」について語りました。<sup>①</sup>それは、否定的な状況「にもかかわらず」、現実の根底にある肯定的な力に信頼して、その否定的な力を乗り越えていこうとする生き方です。そして、その肯定的な力とは、神の支えを意味していました。そうした力に信頼して、否定的な状況「にもかかわらず」、肯定的に生きていくという勇氣こそが、大切なのではないのでしょうか。そして、おそらくは、そうした勇氣をもって新しく生きるとき、わたしたちの心に潜む「なぜ」という問いに対して、答えが与えられていくのではないのでしょうか。「なぜ」という問いに留まるのではなく、それを超えて新しく生きるとき、その中から、わたしたちに語りかけてくる新たな言葉を聞くことができるのだと思うのです。そして、「ヨブ記」は、そうした転換を、わたしたちに迫るものなのです。

### ケネディとケネディ家の勇氣

先ほど、歴史には繰り返し、大地震と呼ばれるような大事件が起きてきたことに触れましたが、二〇世紀という時代は、正にそうした大地震が繰り返し起こった時代であったと言つていいと思います。二〇世紀は、しばしば「戦争の世紀」と呼ばれるように、二つの世界大戦がありました。そして、その後世界各地で、民族の独立のための戦いが繰り返されました。そのたびに、多くの悲劇が生まれました。しかし、同時に、そうした困難な時代であったからこそ、そこにはまた多くの「勇氣」が見られたことも事実ではないでしょうか。わたしは、その中であつて、

二人の人物とその家族について、お話ししたいと思います。その二人は、直接戦争には関係しませんでした。しかし、同じような困難な時代の中にあつて、勇気をもって生きた人々です。一人は、アメリカ合衆国の第三五代大統領になつたジョン・F・ケネディです。そして、もう一人は、ケネディと同じ時代、黒人の地位向上のために戦つたマーティン・ルーサー・キング牧師です。

お気づきの方も多いと思いますが、今年、ジョン・F・ケネディが大統領に就任してから、ちょうど五〇年目の節目の年です。五〇年前の一九六一年一月二十日、ケネディは四三歳の若さでアメリカの第三五代大統領に就任しました。この就任式で語つたケネディの演説は、今ではあまりにも有名です。ケネディは、この演説の最後のところで、人々に、祖国のため、また人類の自由のために、一人ひとりが何ができるかを考え、そして行動するよう訴えたのです。この言葉に多くの人たちが感動しました。そして、その言葉から溢れ出る若さとリーダーシップに、新しい時代の到来を確信したのです。

しかし、ケネディの大統領としての歩みは、多くの困難に満ちたものでした。その最大のものは、キューバ危機であつたと思います。旧ソビエト連邦が、キューバにミサイルを配備する計画が明らかになり、それを阻止するために、ケネディは老獪なフルシチョフと対決しなければなりません。しかし、そうした国外問題だけではなく、国内にも深刻な問題を抱えていました。それは、人種問題でした。一九五〇年代半ばから、マーティン・ルーサー・キング牧師たちを中心とする黒人の地位向上を求める運動が始まり、それが公民権運動となつて全国で展開されていきました。ケネディは、そうした内外の深刻な問題に直面していったのです。そして、そうした問題に、ケネディは「勇気」をもって取り組んだのです。特に、ケネディの生涯を顧みるとき、この「勇気」という言葉を外しては、その生涯を語ることはできないように思います。

実は、何よりも、ケネディ自身が「勇氣」という言葉を愛し、勇氣をもって生きることを重んじた人でありました。ケネディは、その短い生涯の中で、二冊本を書いています。その一冊は『勇氣ある人々』(Profiles in Courage)<sup>2)</sup>という本です。これは、アメリカの議会で活躍した八人の上院議員について論じたものですが、ケネディは、この本において、何よりも政治家の「勇氣」について語っています。それは、時には自分の政治家としての評判を失うような事態に至るとしても、あくまでも自分の政治理念を貫く「勇氣」について語ったものです。そして、それはまた、ケネディ自身の政治家としての姿勢を語ったものでもありました。

しかし、それは、そうした考え方、信念だけではなく、そこにはすでに勇氣をもって生きていたケネディ自身の生き様があつたと言えます。実は、この『勇氣ある人々』が書かれたとき、ケネディは政治生命の最も深刻な危機に直面していました。この時、ケネディは背骨の大手術を受け、術後の療養をしていたのです。下手をすると、一生立ち上がることができず、政治家としての歩みも諦めなければならぬかもしれない危機の中にあつたのです。しかも、その背中への傷は、第二次世界大戦中に部下を救うために悪化させた傷でありました。

ケネディは、ハーバード大学を卒業した後、海軍に入り、魚雷艇の艇長として南太平洋に出撃しましたが、そのとき、たまたま遭遇した日本の駆逐艦「天霧」と激突してしまいます。そして、魚雷艇は真つ二つにされ、一二名の部下と共に海に投げ出されましたが、この時ケネディは、やけどを負った一人の部下を救うために、その救命胴衣のひもを口にくわえて、数マイル離れた島まで泳いだのです。そのため、ケネディは、大学時代フットボールで傷めた背骨を再び傷めることになったのです。しかし、ケネディは、そうした古傷を傷めながらも、部下の命を救うために、わが身を顧みることなく全力を尽くしたのです。この一事にも、ケネディの勇氣ある生き方が示されているのではないのでしょうか。そして、それから一〇年ほど経って、終に手術を受けることになったわけですが、そ



の不安と困難の中にあつた時に、『勇氣ある人々』という本を著したのです。そして、勇氣ある政治家として生きることを自ら宣言したのです。

ところで、そうしたケネディの勇氣は、どこから湧いてきたのでしょうか。おそらく、その一つは、家族の絆にあつたと思います。選挙の度ごとに、ケネディ家が一致団結したことは有名であります。そして、その背後には、カトリックの信仰があつたのではないかと思います。ケネディ自身がどれほど熱心なクリスチャンであつたかは分かりませんが、母親の熱心な信仰に支えられた歩みであつたことは、間違いありません。そして、この母親の生き方にも、息子に劣らず、多くの勇氣が満ち溢れていることを見ることができるとです。

しばしば語られるように、ケネディ家は、多くの栄光を経験した家ではありますが、また同時に多くの悲劇を経験した家でもあります。そして、その栄光と悲劇を身をもって経験したのは、何といつても、母親のローズ・ケネディでありました。ローズ・ケネディは、アイルランド系の移民の出身で、同じくアイルランド系の移民の出身であつた夫と結婚し、九人の子供をもうけました。しかし、その半数が悲劇の死を遂げたのです。長男のジョセフは、第二次世界大戦中、空軍に入隊し、特命を帯びてヨーロッパに向かう途中、その飛行機が爆破して亡くなりました。次男のジョン・F・ケネディは、ご存じのように一九六三年にダラスで暗殺されました。また三男のロバートも、一九六八年、キング牧師が暗殺されて二か月後、やはり暗殺されました。また次女のキャスリーンは、飛行機事故で亡くなり、またその夫も戦死しました。それに加え、長女のローズメリーは知的障害を負つた人で、生涯施設で暮らさなければなりませんでした。そうした家族の不幸や悲しみを母親のローズ・ケネディは見続けなければならなかつたのです。そして、最後には、最愛の夫の死もみとらなければなりませんでした。しかし、そのように繰り返し繰り返される悲劇と悲しみの中で、その度ごとに、勇氣をもって立ち上がったのも、また母親のローズ・ケ

ネデイでありました。そのことを思うと、そうした困難に遭遇しても、「それにもかかわらず」勇気をもって生き抜いていくという精神が、ケネデイ家にはすでにあつたと言えるのです。そして、その精神を、息子ケネデイも、家族の絆の中で受け継いでいったと言えるのではないかと思います。

しかし、改めて、そうした勇気を支えたものは何であつたかを問うとき、それは家族の絆とか、人間的なつながりというだけではなく、その背後にはもつと大きな力があつたのではないかと思います。それは、人間の力を超えた神への信頼であります。先ほども触れましたように、母親は、熱心なカトリック教徒でした。そして、悲劇が起きる度に、それを神に委ねる信仰をもっていた人でした。先ほど司会者に読んでいただきました聖書の箇所の一つ、伝道の書第三章一節から一五節は、母親のローズ・ケネデイが愛した聖書の言葉です。そして、ジョン・F・ケネデイの葬儀の時に、朗読された箇所でもあります。ここには、「天（あめ）が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」と記されています。そして、「生るるに時があり、死ぬるに時があり」と謳われています。それは、この聖書の箇所ですぐ後で、「神はすべての事とすべてのわざに、時を定められたからである」と語られているように、生まれることも死ぬることも、また人生の中で起こる一つ一つのこと、それはただ偶然に起こるのではなく、すべて神の御手において定められ、その支配の中で起こっているということを語ったもので、それは神への深い信頼を告白している言葉なのです。この言葉を愛した母親のローズ・ケネデイは、子供たちが栄光の座に就いた時も、そしてまた悲劇の死を迎えた時も、それは神によって定められた時として受け止め、その悲劇にもかかわらず、神への信頼において生きようとしたのです。そのところに、勇気の最も深い源を見ることができるとは思いません。

## キングとキング家の勇氣

ところで、この時期、同じアメリカで、同じように勇氣をもつて生きた人に、マーティン・ルーサー・キング牧師がいます。ケネディもキングも、最後、暗殺されましたが、死の恐怖というところで言えば、それはキングの方がはるかに大きかったのではないかと思います。キングは、一九五五年の十二月、アラバマ州のモンゴメリーで起こったバス・ボイコット運動に関わることになり、その指導者となりますが、それから間もなくして、自宅が爆破されるといふ事件に遭遇します。そのとき、キングは、まだ二七歳の若さでした。幸い、その時は誰も怪我をしませんでした。しかし、そのときから三九歳で暗殺されるまで、キングは一二年以上にわたって、絶えず死の恐怖にさらされながら生きたのです。そして、特にその晩年は、日々、死を覚悟して生きざるを得ないほどでありました。そうしたキングを支えたのは、何よりも、神への信仰でした。しかも、それは、さまざまな戦いをおして強められ、深められていったキリスト者としての、また牧師としての信仰でした。

キングは、一九歳で牧師になった人です。当時、キングが属していたバプテスト教会では、教会で行う説教試験に合格すれば牧師になることができました。しかし、その後キングは、牧師としての研鑽を積むために神学校に行き、さらにポストン大学の大学院に進学し、博士号を取得しています。とはいえ、早くから、牧師として、神への信仰をもつて生きた人です。しかし、その信仰は、モンゴメリーでのバス・ボイコット運動をおして、またその後の公民権運動をおして、さらに強められ、深められていったと言えます。特に、先ほど触れた、自宅が爆破された事件は、キングに深い衝撃を与えましたが、この爆破事件の時も、キングは繰り返し脅迫を受け、身の危険を

感じていました。そして、その不安の中で、神に真剣に祈らざるを得なかったのです。そして、その真剣な祈りの中で、改めて神に信頼して生きる信仰を与えられたのです。この時のことを、キングは、こう語っています。「わたしは、(この真剣な祈りの中で) 神の御前にあることを感じた。(そして、そのとき) 『正義のために立ち上がれ。真理のために立ち上がれ。そうすれば神は永遠におまえと共にいるであろう』という内なる声……を聞くことができた……。(そのとき) わたしの不安は消え、わたしは何であろうと、これに立ち向かう覚悟を与えられた」と語っています。

このように、キングは、牧師として信仰に生きた人ですが、また同時に、多くの人々によって支えられて生きた人でもありました。中でも大きかったのは、ケネディと同じように、家族の絆でした。キングは、両親の深い愛情の中で育った人です。また、キングには姉と弟がいましたが、兄弟の絆も深いものでした。しかし、このキングの一家も、ケネディ家と同じように、栄光と悲慘を経験した家でもありました。その栄光は、キングが、一九六四年に、ノーベル平和賞を受賞した時に、その頂点に達したと言えます。アメリカでは、最初の黒人のノーベル賞受賞者でした。しかも、三五歳という若さでした。

しかし、反面、キングの一家も、大きな悲慘を経験しています。そして、それを一身に受け止めることになったのは、父親のマーティン・ルーサー・キング・シニアでした。一般にダディ・キングと呼ばれている人です。ダディ・キングは、ケネディ家の母親のローズ・ケネディと同じように、家族の栄光のみならず、その悲慘を、ことごとく嘗め尽くすことになったのです。その悲劇は、何よりも、一九六八年四月四日に起こった、息子キングの暗殺でした。このとき、父親のダディ・キングは、自分の誇りとする最愛の息子を失い、失意のどん底に叩き落とされます。しかし、その時、その悲しみを慰め、支えたのは、家族の絆と教会員たちの支援でした。しかし、悲劇は

それだけでは終わりませんでした。キングの死から一年余り経ったとき、今度はもう一人の息子が自宅のプールで溺死したのです。この時も、ダディ・キングは、家族と教会員によって支えられました。しかし、残酷なことに、悲劇はそれだけでは終わらなかつたのです。その死から五年後、今度は、愛する妻が殺害されるといふ悲劇が起きます。日曜日、礼拝でオルガンの奏樂をしていたとき、精神的な病を負つた黒人青年に、拳銃で射殺されたのです。そのようにして、悲劇が再び繰り返されました。しかし、ダディ・キングは、こうした悲劇が繰り返される中で、絶望に陥るのではなく、かえつて神への信賴を深めていったのです。そして、人生の意味を深くかみしめていくことになりました。ダディ・キングは、晩年、孫たちに対して、このように語っています。「おまえたちは、おまえたちができる最善のことを続けることができるだけだし、またその最善のものでなければならぬ。そして、おまえたちは、何度打ちのめされようとも、よりよくなろうとすることを決してあきらめてはならない」。それは、神への深い信賴に基づく言葉であつたのではないかと思ひます<sup>4</sup>。

### 聖書の語る勇氣

わたしたちにも、こうした勇氣が、必要なのではないのでしょうか。目の前の悲劇にもかかわらず、それを乗り越超えて生きていく勇氣が大切なのではないでしょうか。イエス・キリストも、弟子たちに対して、「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇氣を出しなさい。わたしはすでに世に勝つている」(ヨハネによる福音書第一章三三節)と語っています。自分の死を自覚したとき、イエス・キリストは、弟子たちに対して、「勇氣を出しなさい」と語つたのです。しかし、その勇氣とは、孤独の中で、一人身を奮い起こすような勇氣とは違うものでした。

むしろ、それは深い交わりに支えられた勇気でした。イエス・キリストは、こう語っています。「わたしはひとりであるのではない。父がわたしと一緒におられるのである」（同、第二十六章三二節）。「父がわたしと一緒におられる」、父なる神が自分と共におられる、この確固とした確信こそが、このとき、イエス・キリストを支えた力であったのです。そして、それこそが、生きる勇気の源であったのです。勇気には、この絆があります。それは、父なる神との絆であり、またイエス・キリストとの絆です。そして、その絆に基づく人と人との絆です。そうした絆、交わりこそが、勇気を生み出していくのです。そして、それが、聖書が語る勇気なのです。

### 信仰と希望

ところで、こうした勇気は、改めて触れるまでもなく、「希望」と強く結びついています。ケネディの家族やキングの家族が抱いた神に対する信頼は、それ自体、神に対する希望でもあったのです。神に望みを置くことができるということが、勇気の源ともなっていたのです。ですから、勇気には、そうした希望が必要なのです。しかし、歴史を振り返ってみると、必ずしも勇気と希望は結びついていません。特に、キリスト教に先立つ古代ギリシア世界では、そうではありませんでした。

ギリシア世界は、「勇気」を賞賛しました。哲学者のプラトンは、人間が生きていくうえで最も大切な「徳」の一つに「勇気」を挙げました。しかし、プラトンは、その徳の中に「希望」を入れることはしませんでした。しかも、それは、プラトンの考えだけではなく、古代ギリシア世界全体の考えであったのです。また、それだけではなく、古代ギリシアの人たちは、希望は「悪」であるとすら考えたのです。「パンドラの箱」という神話をご存知だと

「パンドラの箱」には、この世の一切の悪が詰まっています。それなのに、パンドラが好奇心に駆られて蓋を開けたため、その悪が世界に飛び出してしまい、そこであわてて蓋を閉めたところ、最後に「希望」だけが残ったという話です。これには、いろいろな解釈があります。箱の中に希望が残ったから、この世には希望がないのだという考えもあります。しかし、大事なことは、そもそも「希望」は、古代ギリシア人にとっては「悪」であったということなのです。悪の詰まったパンドラの箱の中に、初めから希望が入れられていたということなのです。なぜなら、希望は人々に望みを与えるけれども、それは結局は実現しない望みであるため、所詮、希望は人々を絶望させるものでしかない、と考えたからなのです。絶対的に信頼を置くことのできる存在がないとき、希望は希望ではなくなってしまうのです。それこそ、それは、絶望しかもたらさないのです。

しかし、そういったギリシア人たちに対して、大胆に希望を語ったのが、キリスト教でありました。神への信頼に基づく希望について語ったのです。人間的な希望ではなく、神への信頼に基づく希望において、初めて絶望に終わることのない希望を語ることができたのです。そして、それが、古代ギリシア人も重んじた勇氣と結びついて、後の西洋世界の勇氣となつていったのです。

### 「アメリカン・ドリーム」

ところで、この勇氣と希望に欠かせないものが、もう一つあるのではないのでしょうか。それは、「夢」であります。夢は希望と似ているかもしれませんが。しかし、夢は、人々を希望へと結びつける、もっと身近で具体的な望みであると言えるように思います。いわば、希望と人々を結びつけるものが夢であると言えるのではないのでしょうか。具体

的な夢をもつことが、希望へとつながるのです。その意味では、希望に生きるには、夢をもつということが大切になります。また逆に、希望に生きるとき、そこに夢が湧き起こってくるとも言えます。

先ほどお読みいただきましたもう一つの聖書箇所（使徒行伝第二章一七節）には、「老人たちは夢を見る」という言葉が記されています。老人というのは、人生の先があまりない人たちです。ですから、将来に対して夢をもつことはあまりないかもしれません。しかし、希望をもって生きている老人には、夢があるということです。将来に対する夢をもって生きるということです。それは、将来に対する希望があるからです。自分の人生は途中で終わるとしても、そこで終わらない希望があるために、夢をもつことができるということです。そうであるならば、勇気と希望に生きるということは、夢をもつということにもなるのです。

おそらく、この夢という言葉を聞くと、多くの人が、先ほどお話ししたマーティン・ルーサー・キング牧師を思い起こすのではないのでしょうか。キングは、夢を語った人です。そして、そのことをとおして、人々を奮い立たせた人です。一九六三年八月二十八日に行われたワシントン大行進の最後のスピーカーとして、キングが「I have a dream」（私には夢がある）という名演説を行ったことはよく知られているところです。この中で、キングは、「いつか、……かつての奴隷の子孫とかかつての奴隷主の子孫が、兄弟愛のテーブルに一緒に座ることができ」、また「わたしの幼い四人の子供たちが、いつの日か肌の色ではなく内なる人格によって評価される国にすめるようになる」、<sup>5)</sup>「そういう夢について語りました。しかし、これは、決してキングが見た個人的な夢というのではないのです。むしろ、この夢は、何よりも「アメリカの夢」、「アメリカン・ドリーム」に根差した夢であったのです。それは、独立宣言において、「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって（つまり、神によって）、一定の奪いがたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命、自由および幸福の追求の含まれることを信ずる」<sup>6)</sup>



と謳われている、その理念に基づいた夢でした。そしてまた、その理念に基づいて、すべての人が、自分の能力と努力次第で、社会的成功と地位を獲得できるという夢でもありました。そういう夢を語ったがゆえに、キングは、人々に勇気と希望を与えることができたのです。

ところで、このアメリカの夢を確立したのは、ベンジャミン・フランクリンでした。ご存知のように、ベンジャミン・フランクリンは、しばしばアメリカを代表するアメリカ人とも言われる人で、アメリカの一〇〇ドル札に、その肖像が描かれている人です。フランクリンは、一七〇六年にボストンに生まれた人ですが、この人は正規の学校教育をほとんど受けませんでした。若い時は印刷工として働きながら、独学で学んだ人です。しかし、よく知られているように、多くの発見や発明をしました。また、公立の図書館を作ったり、道路の舗装をしたり、そうした多くの新しい事業を始めた人でもあります。さらに、後には、政治家にもなり、独立宣言の作成に携わり、それに署名もしました。そうした活躍以外にも、文筆家として多くの格言を残しています。「時は金なり」(Time is money)といった格言は、日本でもよく知られています。そうした勤勉で前向きな生き方が、特にフランクリンの死後、フランクリンの自伝や著書が出版されることによって、大いに注目されるようになったのです。しかも、一部のエリート政治家や支配層たちによってではなく、むしろ彼らに対して不満を抱いていた、商人や職人や農民といった、中間層の労働者たちによって注目されるようになり、次第に彼らの英雄ともなっていくたのです。そして、勤勉に働くことよって、誰でもが、その出自によらず、家系によらず、社会的成功と地位を手に入れることができるといふ、夢を実現した人物として、フランクリンは大いに慕われることになったのです。そして、それが、独立宣言に記された理念とともに、多くのアメリカ人の生き方・エートスとなり、「アメリカン・ドリーム」とも呼ばれるようになったのです。

しかし、「アメリカン・ドリーム」という言葉自体は、それほど古いものではありません。フランクリンが活躍したのは一八世紀ですが、その言葉が広まったのは、二〇世紀に入ってからのことです。アメリカの歴史作家のジェームズ・トラスロウ・アダムズが、今からちょうど八〇年前の一九三一年に、『アメリカの叙事詩』<sup>⑧</sup>という本を出版しますが、その中で繰り返し用いたことよって広まった言葉なのです。<sup>⑨</sup>ですから、言葉としては、まだ八〇年の歴史しかありません。しかし、この「アメリカン・ドリーム」という言葉は、アメリカに大きな影響を与えることになりました。この本が出版された一九三一年というのは、その二年前に起こった大恐慌からまだ間もない時で、アメリカは、経済的にも社会的にも、多くの混乱と不安の中で、どん底の時代を経験していました。この時期に、アダムズは、この本を書いたのです。アダムズは、初め、この本のタイトルを「アメリカン・ドリーム」にしようとしていました。しかし、編集者に、今アメリカで、夢を語る本に三ドルも払う人はいないよ、とたしなめられて、仕方なく「アメリカの叙事詩」というタイトルにしたのです。しかし、実際は、そうではありませんでした。この本の中で、アダムズが繰り返し用いた「アメリカン・ドリーム」という言葉は、それまでのアメリカ人の生き方・エートスを表す言葉として、瞬く間に人々の心を捉え、人々の口から口へと語りだされ、広まっていったのです。そして、大恐慌というどん底にいたアメリカの人たちを勇気づけ、そこから立ち上がる力を与えたのです。しかも、その後台頭してきてドイツのヒットラーや旧ソビエト連邦のスターリンに対抗する上でも、この言葉は大きな武器となっていました。<sup>⑩</sup>そうした、絶望のどん底にいたアメリカ人たちが奮い起こし、立ち上がらせたのが、この「アメリカン・ドリーム」という言葉なのです。

## 「ジャパニーズ・ドリーム」

そのことを思いますと、今こそ、日本でも、夢をもつことが大切なのではないでしょうか。そして、勇気と希望をもつて生きていくために、日本の夢、「ジャパニーズ・ドリーム」を語る時なのではないでしょうか。この時期、「夢」について語ることは不謹慎だと思ふ人もいるかもしれませんが。しかし、そうではないように思うのです。むしろ、こういった時期だからこそ、あえて「夢」について大いに語るべきなのではないでしょうか。大恐慌の中で「アメリカン・ドリーム」を語ったように、未曾有の大震災の中で、日本の夢を語るのです。そして、この日本には、その夢を語るにふさわしい状況がたくさんあると思うのです。

今回の大震災で、わたしたちは多くのものを失いました。多くの人命を失い、多くの財産を失い、多くの町を失い、そして多くの思い出を失いました。そして、将来に対する希望も失いかけているかもしれないかもしれません。しかし、反面、得たものもあつたのではないのでしょうか。その一つは、世界からも注目された、日本人のもっている良い国民性に改めて気づかされたということがあるのではないかと思います。大震災の中で、人々は秩序を保ち、忍耐力と団結力をもつて、困難な時期を耐え忍びました。また、その後の歩みにおいても、避難所生活でも、概ね秩序ある生活を保つことができました。そうした秩序ある協調性というのは、日本人の大きな財産ではないでしょうか。これに加え、もう一つ印象的なことは、多くのボランティアが、災害からの復興に参加しているということです。これは、一六年前に起こった阪神・淡路大震災の時から始まった新しい動きです。その時は、ボランティア元年などと言われましたが、しかし、今やそれは定着し、今回も多くの人たちがボランティア活動に参加しています。もち

ろん、そこには海外からのボランティアがあることも忘れてはなりません。失意の中にありながらも、こうした姿を見ると、日本もまだまだ捨てたものではないと思っただ人も多いのではないのでしょうか。そして、そうした人間の絆から、勇気を得た人も多いと思います。

また、今の日本には、「アメリカン・ドリーム」が理念とした、人間一人ひとりの尊厳を守るといふ精神が、行き渡りつつあるように思います。日本国憲法においても基本的人権が高らかに謳われ、その精神が浸透してきているのではないのでしょうか。小さいことかもしれませんが、最近では、ハラスメントということが盛んに言われるようになりました。「セクハラ」とか「パワハラ」といった言葉が普及し、日常生活の個々人の人権も、かなり注目されるようになりました。そうした意味では、個人の尊厳ということは、まだまだ表面的かもしれませんが、浸透しつつあるのではないのでしょうか。

そしてまた、日本には、すぐれた文化と技術があります。確かに、経済的には、バブルが弾けて、行き詰まりを感じていますが、それでも、すぐれた文化的生活を守っています。そしてまた、バブルが弾けたとはいえ、日本は戦後、人類の歴史に類を見ないほどの著しい繁栄を経験しました。これは、大きい財産であると思います。豊かさを知ったということとは、それ自身が大きな経験であり、また財産であると思います。もし、あの豊かさを知らなかったら、日本は今でも欧米に追いつけ・追い越せとの精神で、経済的価値観ばかりを追う生活をしていただけないでしょうか。しかし、バブルが弾け、今、この未曾有の経験をして、今までの生き方を深く反省させられる機会を与えられているのではないのでしょうか。そして、今までの生き方ではなく、もっと別の、新しい生き方の必要性に気づかされ始めているのではないのでしょうか。そして、それを見極め、それを語ることが、今、歴史の中で日本に与えられている使命ではないかと思うのです。そして、そこに、日本の夢もあるのではないのでしょうか。

それでは、どのように、わたしたちは変わるべきなのでしょう。それは、何よりも、価値観を変えるということではないかと思えます。第二次世界大戦後、ずっと続いてきた経済的観念に基づく人生観、あるいは価値観を、変えることです。そして、その中でも、幸福についての考え・幸福(観)の転換ということが、今、必要なのではないのでしょうか。

わたしたちの抱く夢というのは、それは幸福観と結びついています。幸福になりたいというのが、夢であるといつてもいいと思えます。ですから、どういう幸福観をもつのが大切になってきます。そして、その点で、今、価値観の転換が必要なのではないのでしょうか。そして、その点から言えば、日本の夢というのは、アメリカン・ドリームとは少し異なってくるのではないかと思うのです。アメリカン・ドリームというのは、基本的には、「個人の成功」を夢見るものです。しかし、今、そうした価値観は転換を迫られているのではないのでしょうか。一人、社会的に成功するという幸福観ではなく、むしろ、全体が一つの喜びに与っていく、あるいは一つの富を分かち合っていくという幸福観が、今、大切になってきているのではないのでしょうか。わたしが大学時代、哲学を習った先生に、岩田靖夫先生という方がいますが、その先生がこの春新しく本を出され、その中で、今こそ幸福概念のコペルニクス的転回が必要であると語られています。岩田先生は、こう語っています。『自己実現が幸福である』という現代では常識となったギリシア起源の幸福観から『他者のために自己を献げることが善である』というヘブライ起源の幸福観への転回が必要である、<sup>①</sup>そう語られています。この先生がクリスチャンであったかどうかは覚えていませんが、岩田先生は、ギリシア哲学の専門家であるにもかかわらず、「自己実現が幸福である」というギリシア起源の幸福観から、「他者のために自己を献げることが善である」というヘブライ起源の幸福観への転回が必要である、<sup>②</sup>というのです。ヘブライというのは、聖書の世界のことです。ですから、ギリシア的幸福観から、聖書的幸福観へと転回

すべきであると語るのです。それは、もつと平たく言えば、〈自分を中心とした、自分のみの幸福を求める幸福観から、他者をも視野に入れた、他者と分かち合う幸福を求める幸福観〉に変わらなければならないということです。そして、わたしも、このことに賛成なのです。

従来の幸福観というのは、簡単に言えば、ナンバーワンになること、一番になることが幸福であるという生き方であったと思います。そこまで行かないとしても、自分の目標を成し遂げ、経済的豊かさと社会的地位を得ることが幸福であると考えられていました。しかし、それは、本当の幸福なのでしょうか。そう問わざるを得ないのは、戦後のそうした生き方が、今、さまざまな深刻な問題や弊害を引き起こしていると言わざるを得ないからです。よく指摘されるように、ここ一〇年以上にわたって毎年の自殺者が三万人を超えています。それは、必ずしも、バブルが弾けて経済的な行き詰まりが生じたからだけではないように思います。むしろ、生き方に問題があるということではないでしょうか。従来の幸福観に問題があるということではないかと思うのです。そして、それは、個人を中心とした、個人の幸福追求のあり方に問題があるのではないかと思うのです。もちろん、自分を生かし、自己実現を目指すということは大切だと思います。しかし、問題は、他者との関係です。他者があつての自分ですし、自分の幸福には他者が深く関わっています。自分がよければ、それで十分だとはいかないのです。むしろ、一人ひとりが幸福になる中で、全体が幸福にならなければならないのです。単に自己実現を目指す生き方は、一部の人には可能かもしれませんが、全体的に見た場合は、それは不可能です。そこで、大切なことは、自分も他者も幸福になるということです。そして、そうした幸福観は、先ほど紹介した岩田先生の指摘にもあるように、実は、聖書の語る幸福観でもあるのです。

聖書のコリント人への第一の手紙というところに、こういう教えが示されています。それは、教会についての教

えで、教会を人間の体にたとえて、こう語っています。新共同訳聖書で読みます。「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。……だから……目が手に向かって、『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません。それぞれどこか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。……神は、見劣りのする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」(第二章一四―二六節)。これを書いたパウロは、教会は、一つの体のようなもので、いろいろな部分から成り立っており、それぞれが大事な役割をもっていると言うのです。そして、部分が全体を形成し、全体の出来事に共に参与し、苦しみは互いに担い合い、喜びは共に分かち合っているというのです。このことは、教会だけではなく、社会にもあてはまるのではないのでしょうか。そして、こうした生き方・考え方がいいのでしょうか。

すべての部分にそれぞれの役割があり、それが全体を形成し、その全体の悲しみにも喜びにも共に与っている、そして、その中に、全体の幸福のみならず、個々人の幸福もある、という考えです。こうした生き方・考え方がいいのではないかと思うのです。そして、そこに、今までの日本にはなかった新しい歩みがあるとも言えるのではないのでしょうか。そこでは、能力のある人もない人も、年配者も若者も、男性も女性も、貧しい人も豊かな人も、社会的地位がある人もない人も、健康な人もそうでない人も、それぞれが、自分の担うべき役割を担うことによって、社会の形成に貢献し、共に社会全体に与る中であって、全体の労苦と喜びと共に参与しながら、自分の存在の意味と喜びを見出していくのです。おそらく、そこでは、一人ひとりが、自分の使命というものに気づくことが大切になっていくと思います。社会における自分の役割、使命というものに目覚め、その使命に生きる中であって、自己

を実現していくことです。ただ自分の幸福のために自己を実現するのではなく、使命に生きることにおいて、他者の幸福のためにも身をささげつつ、自己を実現していく生き方です。そうした生き方、そしてそうした幸福観こそ、今大切なのではないのでしょうか。

それは、一言で言えば、「使命に生きる」ということです。使命に生きる中で、自己実現をする生き方です。そうした他者や社会全体との関連の中で自分を生かす生き方が、自分をも他者をも幸せにする生き方なのではないのでしょうか。そして、そうした生き方は、豊かさを経験し、その恵みも、その弊害も知った日本こそが、そしてまた、その豊かさが損なわれ、人間の存在のもろさを経験した日本こそが、初めて語り得ることなのではないのでしょうか。わたしは、あえて、それを日本の夢として語りたいと思うのです。それは、今の日本だからこそ、語り得る夢であるからです。

しかし、それは、日本の夢だけではなく、世界の夢でもあると思います。すべての人が幸福になれるというのは、全世界の夢であると言っていないのでしょうか。能力がなければ、お金がなければ、生まれが良くなければ、あるいは環境が良くなければ、幸せになれないというのは、本当の幸せではないと思います。個人的・社会的にどのような状況の中に生まれるとしても、一人ひとりが自分の使命を見出し、それを通して社会の形成に参与しながら、自己実現を目指していく、そして、その生き方が、自分をも社会をも豊かにする歩みとなっていけば、それは万人に開かれた幸福観であるということになるのではないのでしょうか。

日本には、そうした生き方ができる資質があると思います。日本は、すぐれた国民性と文化と歴史的経験をもっています。そうしたものを踏まえ、今、幸福についての価値観を転換することができるならば、日本は、世界に、今までとは違った仕方で貢献していくことができるのではないのでしょうか。そして、そこにまた、日本の果たすべ



き使命があると思います。ただ、最後に、そうしたすぐれた資質をもつ日本ですが、その日本にも多くの欠けた点があることを認識しなければならぬと思います。そして、その中でも最も欠けているものは、神への信頼ではないでしょうか。勇氣と希望の源である神への信頼、これこそが、今の日本に最も欠けていることだと思えます。しかし、もし、この信頼を獲得していくことができるならば、日本は、将来において、大きく羽ばたいていくことができるのではないのでしょうか。少なくとも、そういう方向性をもっているのではないのでしょうか。

そのためにも、そうした生き方を、まず、わたしたちから始めていきたいと思うのです。神への信頼に基づく勇氣と希望をもって、まずわたしたちが価値観を変え、すべての人が幸いになれる道を目指して歩んでいきたいと思うのです。そして、このような未曾有の大震災を経験した今だからこそ、心をますます未来へと向け、すべての人々の幸福を夢見ながら、前進していきたいと思うのです。

### 注

- (1) パウル・ティリッヒ著、大木英夫訳、『生きる勇氣』平凡社ライブラリー、一九九五年。
- (2) ジョン・F・ケネディ著、宮本喜一訳、『勇氣ある人々』英治出版、二〇〇八年。
- (3) マーティン・ルーサー・キング著、雪山慶正訳、『自由への大いなる歩み』岩波新書、一九七九年 (Martin Luther King, *Stride Toward Freedom, 1958*)、一六八—一六九頁。なお、雪山訳を少し変えて引用した。
- (4) ダディ・キングに関しては、以下の拙論を参照。菊地順「ダディ・キング」、聖学院大学発行『キリスト教と諸学』第二二号、二〇〇六年、一九六—二二七頁。
- (5) マーティン・ルーサー・キング著、梶原寿監訳、『私には夢がある——M・L・キング説教・講演集』新教出版社、二〇〇五年、一〇三—一〇四頁。なお、梶原訳を少し変えて引用した。

- (6) 高木八尺他編、『人権宣言集』岩波文庫、一九九六年、一一四頁。
- (7) 以上の論述は、以下の文献によった。ゴードン・S・ウッズ著、池田他訳、『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』慶應義塾大学出版会、二〇一〇年、二八六頁以下。
- (8) James Truslow Adams, *The Epic of America*, 1931.
- (9) ただし、アダムズが「アメリカン・ドリーム」という言葉を最初に言い出したのかどうか、あるいは誰かが言っているのを用いたのかどうか、は不明である。
- (10) 以上の論述は、以下の文献によった。Jim Cullen, *The American Dream: A Short History of an Idea That Shaped a Nation*, 2003.
- (11) 岩田靖夫、『ギリシア哲学入門』ちくま新書、二〇一一年、五一頁。少し省略して引用したが、元々は以下のように記されている。「その転回とは、『自己実現が幸福である』という現代では常識となったギリシア起源の幸福観から『他者のために自己を献げる（大いなるものに自己を委ねる）』ことが善である』というヘブライ起源の発想への転回である。」

(二〇一一年十月十九日、「秋のキリスト教週間講演会」講演)